



1979-1

No.124

表紙 賀歌(おほそらに)(蓬萊切)  
解説は26ページ参照  
題字デザイン・桑山弥三郎  
カット・林美紀子

## もくじ

[年頭所感]

日本文化の将来について……………犬丸 直……4

埋蔵文化財随想 ……………斎藤 忠……6

西ドイツの国語施策 ……………遠藤慎吾……8

世界クラフト会議の京都大会に出席して  
……………福永重樹……11

文化庁ニュース

史跡の指定等  
——文化財保護審議会の答申——……………15

重要無形民俗文化財の指定等  
——文化財保護審議会の答申——……………16

第25回文化財防火デー(1月26日)……………19

昭和53年度地方文化施設職員研修会の開催について ……20

宗教団体・教師・信者数の現況 ……………21

公益信託山本有三記念基金(略称)の発足……………21

文化庁企画・提供「美をもとめて」2月の放送予定……………22

[紹介]

“文化的使用料”に対し相互に免税  
——チェコスロバキアとの  
二重課税回避条約—— ……大家重夫……23

民俗歳時記シリーズ 1月

小正月の訪問者 ……………天野 武……25

我が県の文化行政

東京都の文化行政 ……………猪野重利……27

美術館・博物館・文化施設めぐり②③

特産の五色石を打ちこんだ  
高知県立郷土文化会館 ……………30

国立劇場ニュース ……………31

# 埋蔵文化財随想



斎藤 忠

(文化財保護審議専門委員)



一、埋蔵文化財とマスコミ

昨年九月二十日から、私は、いかに多忙な生活の中につつまれてしまった。各新聞社からの電話、しかも、これは、夜中の二時頃も遠慮なくかかってきて、私の熟睡のひとときを破った。それは、鉄剣に銘文が発見されたというニュースが発表されたためである。三か月たつて、ようやく平穏な生活にもどつた今日この頃、私は、あらためて埋蔵文化財とマスコミという問題について考えてみたのであった。

最近におけるニュースで、埋蔵文化財関係、すなわち考古学上の発掘や発見の記事がとりあげられる傾向が、急激にいちじるしくなつたことは、万人のみとめるところであろう。ほとんど毎日にわたつて、関係記事が掲載されていなくはないといつても、過言ではなからう。しかも、それは、従来政治記事面といわれてきた第一頁にも、または社会面の記事のトップにも、大きくとりあげられているのである。一方、テレビ等においても、そのとりあげ方は頻繁である。読者はいやおうなしにこれに目を通し、視聴者はスイッチを切ることもなく、これを目に

これにいち早く知らせることを使命とする新聞やテレビにおいて、そのとりあげ方がまぢまぢであつてはならない。もつとも、これは、報道関係のみを責めるべきではないであらう。その地域にある記者諸氏の手腕いかんはさることながら、ニュースのもとをにぎる研究者自身の姿勢もまた原因するであらう。

また、発掘や発見の関係者が、いわゆる共同発表の場に臨む場合、同一の資料にもついで同一の発表をするわけである。これをはやくに受け入れ、その重要なポイントはいち早く把握するか把握しないかによつて、ニュースとしての発表の内容及び大きく影響される。発表後の質問も同じであり、鋭い質問が寄せられる反面、こんなことがわからないのかと失望するような質問もある。あらかじめ勉強し、関係記事を丹念にはりつけたスクラップブックやこまごまと記したノートをもつてくる熱心な記者に対するときは、発表者もまたおのずから緊張してくる。埋蔵文化財問題は、マスコミの中につつまれ、今後なお活発に展開されるであらう。関係者もまた、このような問題について、それぞれの立場から一考する必要があるのではなからうか。

## 二、埋蔵文化財と研究者の姿勢

開発事業にとりまう埋蔵文化財包蔵地の調査は、近年にわかに活発になつた。恐らく、近年における日本考古学上の学術発掘調査のほとんどは、この種の埋蔵文化財保存対策を中心としたものといつても過言ではなからう。

研究機関なり研究者自身が、自らの費用を投じた本来の研究を目的とした発掘調査はほとんど行わず、むしろ膨大な予算をもつて行われる

し耳にする。そして、国民は、旧石器・貝塚・銅鐸・弥生文化・木簡・磯部・石棚・前方後円墳・夾紵棺・和同開珎等の名称についても理解し、その発見に関心を寄せる。マスコミの大きい効果である。たしかに、殺伐とした事件や、心を暗くする事件よりも、読者や視聴者に一種の安らぎの気持ちよみだかせ、国民の文化的な教養を一層高まらしめるものでもあらう。

しかし、私は、この際、ニュースとしての取り扱い方について、考えを述べたい。過去をかえりみると、発掘関係の記事は、早くからマスコミにとりあげられてきた。明治十年、モースが、大森貝塚を発掘したとき、当時の日々新聞が、「開成学校お雇ひ大博士イー・エス・モールス氏は曾て瀛州にて大森を経過せし時、倉卒の際には、一つの小芥丘をキツト観察して、其只物に非ざるを豫て疑ひ居りしが、疑念勃々胸懐を離れざれば、此頃ろ終に其穿鑿に着手して此小芥丘を発見せしければ云々」という記事を掲載したことなど、古い例であらう。その後、現在に至るまで、関係記事を整理すれば、膨大な量に達する。このような記事をできるだけ収集し整理し閲覧の便にそなへることも、学史編さん

開発事業等を目的とした調査に参加する。しかも、緊急性をともなうことも多い関係で、こつこつと自らの方針にしたがつて、地味に調査するというものも少ない。

このような現状に照らし、地方公共団体においても、管下の埋蔵文化財包蔵地の対策のため、多くの調査専従者を擁している。戦前、地方官庁における専従職員は、「史蹟主事」という名のもとに一人配られていた。戦後、多くの場合、非常勤の形で、学校の教員をつとめた人が、この仕事をやつてきた。既往を思えば、まことに今昔の感に堪へぬところである。

一方、かつては、埋蔵文化財保存に対する国民の熱意もまた、希薄であつた。宏壮な前方後円墳が、学校敷地の盛り土用の採取のために破壊消滅されても、重要な寺跡の敷地に路線が貫通されようとしても、いざさかの反対運動も展開されなかつた。

現在においては国民がこぞつて埋蔵文化財に対する認識をもち保存しようとする意欲をもつている。これまた、隔世の感があるといつてよい。ただ、私は憂えている。国民の熱意が高揚しているにつけても、各地にあつて埋蔵文化財関係の任務にあたつてはいない人々や、研究者が、その上に安坐を組んではいけなやといふこと、かりにこのような気持ちがあるならば、やがては埋蔵文化財公害という名で、国民から離反することもなからうかということである。

各地を旅行すると、いろいろな話を耳にする。畑地に一片の土器片が落ちていたのを、行政関係の研究者はとりあげて、かたわらの工事関係者をかえりみ、絶対に工事はだめだ、もし工事するならば、何千万円の費用を負担せよと事もな

の事業として重要なことと思つてゐるが、とにかく過去のながい経過の間でも、現在のように、大きく、にぎやかにとりあげられることはなかつた。

この点、現在のとりあげ方は、異常な傾向といつてもよい。このような傾向になつた一つの原因は、むしろ、マスコミ関係の記者諸氏の互いの競争心理にもあるのではなからうか。そして、各関係者が、あるいは競うように、あるいはスクープとしてとりあげようとするのでなからうか。私は、今年の三月、マルコ山古墳の発掘のニュースに関連して、ある新聞社からの電話に対し、一つの有力紙ぐらゐが、社会面に小さく、「マルコ山古墳の調査終わる」程度の記事で、淡々と取り扱つたところがあつてもよかつたのではないかと話した。しかし、一社もこのような記事にせず互いに競うごとくに大々的な報道となつた。

一方、埋蔵文化財関係のニュースでも、しばしば、なぜこのような程度の記事が大きくとりあげられるのだろうか」という疑問をもつものもある。この問題は、ニュースをとりあげる第一線の記者諸氏、あるいはこれを採用するデスクの方々の構えいかんにかかつてくる。このニュースが、果たして全国の読者や視聴者に知らされるべき価値のあるものか、あるいは一地域社会のニュースにのみとどめるべきか、全くとりあげないでよいのか、この果敢なかつた確な判断こそ重要であらう。

また、各地の発掘や発見を知る機会も多いが、中には、なぜこのような重要な発見がとりあげられず、国民に伏せてあるのだろうかと思つたとすらある。公正な報道をモットーとして、国民の

げにいったという話、古墳らしいものがあるといふことで、十分に確認しないままに原業者に費用を負担させて調査し、古墳でも熱心なやつたという話、これらは、保存行政に何心もなかりであつたろうか、反省させられるものもあるのではなからうか。

一方、研究者においても、いくつかのうわさを耳にする。その種の遺跡を発掘した経験のない人が行政機関から調査を委嘱され、結局何もわからないような調査になつてしまつたという話、原業者負担によつて緊急に調査を進めたい必要のある遺跡に対して、調査関係者は、週に二、三度しか現地を踏まず、いつ終わるかかわからぬ調査となつて、工事関係者を焦燥させたという話、当然保存を強調しなければならぬ立場にある人が、周辺の利害関係のためにうやむやにしてしまつた話、出土した多量の出土品を、未整理という名のもとに、地元保存施設があるにもかかわらず、保管をまかせない話、報告書の原稿の提出を故意におくらせ、その主体者である地方官庁の関係者を困惑させているという話など、中には週刊誌の話題になつたものすらある。

このような問題については、私も昨年の春に考えるものがあるのではなからうか。昨年の春の日本考古学協会の総会のとき、一人の会員は、研究者の姿勢の問題をとりあげた。日本考古学協会に、埋蔵文化財対策特別委員会というものがあつて、保存運動に積極的である。会員である研究者の保存運動の声を聞くとともに、地元の市町村等にあつて、埋蔵文化財調査に対する研究者の姿勢のために、いかに苦闘しているかについての事例を各地から寄せてもらい、参考にすることも必要ではなからうか。

編集後記

○昭和五十四年、一九七〇年代の最後の年、本年はどんな年となるのか。かつての経済の高度成長はもはや望めず、逆に物より心を重視する時代に移ったとは、ここ数年各方面での指摘のとおりだが、自らの考え方、個性に基づく生活様式を求める姿勢がより顕著になり定着してきているというのが大方の見方であろう。

○昨年は、文化庁創設十周年、本年はまた新たな十年、二十年の出発の年である。財政の枠が極めて厳しいため、文化関係予算の大幅な増加は一挙には困難であろうが、国民の文化志向の高まりに比べて、着実に前進させなければならない課題は多い。

○本号では、年頭の所感として犬丸長官が、グローバルな視点から日本文化の継承と創造について述べられている。(史)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課  
TEL(03)三六八二二四(代表)

「文化庁月報」 一月号

昭和54年1月25日印刷・発行

編集 文化庁

〒100東京都千代田区成田3丁目2番2号  
発行所 株式会社 きょうせい

本社 〒100東京都中央区銀座7丁目4番12号  
営業所 〒100東京都新宿区西五軒町52番地

電話 (03)三六八二二四(代表)  
振替口座 東京九一六一番

印刷所 発行政学会印刷所

定価・一五〇円(送料二九円)  
年間購読料 一、八〇〇円